

〈東京支部〉

創立四〇周年を迎える 「関東地区学生生活連絡協議会」 と学生相談最前線

東京支部は都内三か所の国際交流会館を有し、ここを基点に留学生、日本人学生、地域との交流事業に力を入れている。他に、留学生のための宿舍を安定確保することを目的とした指定宿舍事業、学生のための体験ボランティア等、学生の目線に立った業務を行っている。

当支部の特色として首都圏の私立大学八五校が加盟する「関東地区学生生活連絡協議会」(以下生連協)との関連がある。「生連協」は昭和二四年、都下四六大学と(財)学徒援護会(後の内外学生センター、平成一六年解散、一部業務を本機構に継承)を事務局として「学生アルバイト対策協議会」として発足、以来アルバイトに留まらず、学生生活全般に係る問題に関し、現場職員の立場で討議、研究を行ってきた。近年、特に取り上げられている「学生相談」に関し、新たな方向性を目指す会員校の中から、本年度会長校である関東学院大学の取組について、紹介したい。担当の学生

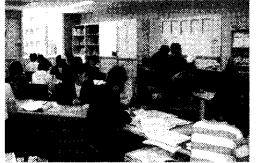
生活課課長補佐山崎浩一氏に説明をいただいた。

【経緯・目的】安心感と充実感を与えるための総合窓口！

二〇〇三年一〇月、学長方針である「学生本位の大学づくり」を支援するため、学生サービスに係る総合部署について検討するプロジェクトが発足した。プロジェクトでは、一人ひとりが学生の立場になり、さらなる学生サービスの内容について検討した。そして、たんなる案内窓口(適切部署への振分)ではなく、より充実したキャンパスライフを過ごすためのサポートを目的とした、学生に安心感と充実感を与えるための総合相談部署、学生支援室の設置を要望することにした。

一方、二〇〇三年度から工学部では、多様なレベルの学生に工学基礎科目(英語、数学、物理学、化学、情報やITスキル、生物学など)の学習支援を行おうという強い動きがあった。いわゆる学習支援センター(いずれは専門科目におけるサポートも含む)構想である。ここでは、専任教職員(ボランティア)、客員チューター、アシスタントチューターさらには非常勤講師まで活用して、教室では質問できないようなことでも、このセンターでなら質問できるような雰囲気を作って、学生の助けになろうと考えていた。二〇〇四年四月、上述の二つの流れが一つになり、関東

学院大学金沢八景キャンパスに学生支援室が開設されるに至った。ここでは、学生生活支援として学生生活に係る疑問や悩み、大学や教職員に対する要望などを的確につかみ、それを教育の現場や学生生活支援活動に還元するといった、情報収集や分析、それらデータをもとにした情報発信の機能を果たすことが求められた。もちろん、教科目の学習における個別指導を行うことも、もう一つの重要な機能として設定された。そのようなかたちで、多くのスタッフによる学生支援室・学習支援センターを展開することとなった。



【現状】教職員と学生、仲間として！

学生たちと接するにあたって、こんなことをスタッフ同間の合言葉とした。

- 「受・敬・共・信・誠の考え」
- ① 学生のありのままを受け止める。
 - ② 学生自身とその生き方を大切に。
 - ③ 学生の気持ちを実感しながらも巻き込まれない。
 - ④ 学生が心から安心して頼れる存在となる。
 - ⑤ 学生の前で自然体になる。

選択肢を広げ、それによって自ら新たな考え方や、解決方法を見つけ出してもらえよう心がけている。むろん学生支援室ですべての相談事が解決するわけではない。教務課、学生生活課、就職課、カウンセリングセンター等との連携がなによりも大切であり、適切な部署への橋渡しの役割を果たすことも学生支援室の重要な役目となっている。

【二〇〇五年度の展望】

二〇〇五年度からすべてのキャンパス（金沢八景、金沢文庫、小田原）で学生支援室が設置されることになった。各キャンパスともに学生生活支援と学習支援を二本の柱とし、学習支援では各学部での開講科目に合わせた学習上の相談に応じ、アドバイスをを行う予定にしている。

二〇〇四年七月に「ダメされるな！ 悪質商法・マルチ商法」をテーマに講演会を開催したが、次年度はトラブル回避講座に加え、学生たちが何かを発見できるような「ミニ講座」を五回程度予定したい。さらには、コミュニケーション・スキルアップを目的として、多くの学生と知り合い共同作業をするといった学生参加型のプログラムを立案計画し、それを実行することによって、学生自身が関東学院大学での自分の存在を実感できるような機会をつくりたい。

また、よく耳にすることだが「学生同士のほうが話しや

これらのことが学生たちとの同じ仲間としての関係づくりに繋がり、さらには学生たちの口コミによって「なんでも聞ける、気軽に立ち寄れる」という噂となって広がった。

二〇〇五年一月末までに延べ七〇〇名を超える学生たちが学生支援室を訪れた。開設当初、履修相談の学生を中心に一〇〇名を超える学生が来室した。四月ということもあり、一年生が大半であった。五月に入り一応の落ち着きを見せたが、一日平均二〇名〜三〇名の学生が来室した。新聞の勧誘、不当請求、アルバイト紹介、PCの使い方、資格取得、転部、授業についての相談等が多くなってきた。相談内容は個人的な悩みから学習上の不安に関すること、学生生活全般にわたる多岐なものになってきた。春学期末には定期試験が始まり、学習力に不安を持っている学生が二二〇〇名も訪れアドバイスを受けていた。

深刻な悩みを持って来室する学生、不平不満をぶちまけに来室する学生もいる。ときには一時間以上にわたって相談に応じる場合もある。とにかく学生の話を聞くこと、アドバイスするよりも、まずは学生を受け止め、話を聞いてあげることが大切なことである。ほとんどの学生は時間をかけ話しているうちに、安心感や満足感に満たされた表情に変わっていくのである。一方的なアドバイスではなく、解決するための

「すい」と思っている学生が多いことも事実である。そこで、次年度については、履修登録、時間制作成等のアドバイスの範囲に留めるが、学生による「ピアサポートスタッフ」を募集し、先輩学生による学生の支援体制も検討している。将来的には教職員と学生が一体となった、学生生活支援体制を築き上げたい。



東京支部として

昨年の生連協夏期研修会において、学生のコミュニケーション不足に着眼した内容の講演がなされた。人間関係の構築が難しい今日、些細なことでも「話す」ことが信頼関係を作る重要な要素なのかも知れない。これらの取組みは生連協の研修会等で取り上げ、学生指導・サービスといった問題を机上の論でなく、現実の問題として検証している。

また山崎氏によれば、学生支援室設置にあたり、先行して成果をあげている東海大学・学生生活支援室室長、曾田氏からのアドバイスによるところが大であったとのこと、今後も大学間の情報交換はより重要と考えられる。

東京支部としてもこれまで以上に生連協と情報交換を行い、学生、大学にとつてより有意義な事業を展開したい。